

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K17294

研究課題名(和文) 協調的幸福感尺度の文化・地域間比較研究

研究課題名(英文) Cross-cultural and regional studies of the interdependent happiness scale

研究代表者

一言 英文(Hitokoto, Hidefumi)

福岡大学・人文学部・講師

研究者番号：80752641

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、申請者の作成した協調的幸福感尺度(対人関係が良好で、平穏無事で、人並みであることを測定する心理尺度)の構成概念妥当性を日本、ポーランド、フィリピン、および、日米の地域差を比較することで実証した。その結果、協調的幸福感尺度が集団主義的な文化の幸福感を捉えており、地域など個人に近い社会環境の影響も受けることが示唆された。この結果は、さまざまな文化で測定される幸福感に、文化的視点を導入することの重要性を示唆している。

研究成果の概要(英文)：The current series of studies examined the construct validity of the interdependent happiness scale (measuring interpersonal harmony, quiescence, and ordinariness) across Japan, Poland, Philippines, as well as prefectures and states within Japan and the United States. Results supported that the interdependent happiness scale is uniquely capturing the happiness shared among collectivistic cultures, and further indicated that the scale might be affected by the immediate social structural environment close to the individual. Overall, the finding calls for the need to incorporate cultural awareness in measuring happiness across cultures.

研究分野：社会科学

キーワード：協調的幸福感 文化 幸福感 個人主義-集団主義

1. 研究開始当初の背景

幸福感研究に用いられる測定尺度は、個人的な幸福を表現する項目によって構成されており、幸福の関係的な含意を測定しきれていないという問題があった。申請者のそれまでの研究により、集団主義文化を始めとする協調的な文化的文脈における幸福の測定には、「協調的幸福感」を用いることが、人々の幸福感をより効率的に捉えているという点で有効であることが指摘されていた。

本研究は、多極化と文化変容の時代における持続的な幸福の実現が求められる現代日本社会の時代の趨勢の中で、幸福に対する文化的、協調的含意を測定する意義がある。

2. 研究の目的

本研究では、申請者の提案した協調的幸福感という概念を測定する心理尺度の構成概念妥当性研究を、先行研究より比較する文化圏を拡張することで行った。具体的には、先行研究にて調査対象でなかった文化(例: 東欧や東南アジア)と地域比較(州や県)を用いることで、協調的幸福感と文化的次元の関係をより明確化しつつ、世界の中で国の違いや地域の違いといった単位が介入単位として実質的に重要となる幸福政策など応用分野に貢献できる基礎データ収集を行うことが目的であった。

3. 研究の方法

平成28年度は、ポーランド(n=312)とフィリピン(n=272)、および日本の学生(n=676)を対象とし、社会調査を行った。手続きとしては、協調的幸福感尺度(Hitokoto & Uchida, 2015)、自尊心や肯定的感情を各国にて測定した。これにより、申請者が先行研究で明らかにしてきた協調的幸福感の構成概念妥当性を、先行研究とは異なるが同様の文化差を想定できる国の間で再現した。具体的には、より集団主義的な国では一般的な肯定的感情に対する協調的幸福感の効果が強く、自尊心の効果が低くなるという仮説を検討した。

協調的幸福感の効果は洋の東西を比較することで主張されていたが、日米で異なる不確実性の回避の文化差が平穏無事や人並みといった不安低減に関わる項目を含む協調的幸福感の効果の文化差に寄与している代替説明も成立する。対象の3ヶ国は、個人主義-集団主義の他に不確実性の回避においても文化差が報告されており、両文化次元は重ならない(集団主義はフィリピン、日本、ポーランドの順で高いが、不確実性の回避は日本とポーランドで高く、フィリピンで低い; Hofstede, 2001)。このことを利用し、協調的幸福感の効果が集団主義に伴うものであって不確実性の回避に伴うものではないことを検討した。

続いて、学生からの一般化として社会人を対象とした社会調査も実施し、ポーランド(n=505)と日本(n=302)の2国間で学生と

同様の文化差が得られるか再現検討した。

上記国際調査を経て、協調的幸福感の効果が集団主義の文化差に伴うものであることを確認した後、日米それぞれの国内の地域文化差を用いて、理論的に同様の仮説を再現検証した。すなわち、先行研究で報告されている日本の都道府県、および、アメリカの州における個人主義-集団主義の社会環境変数による地域得点を用い、それぞれの国内で広範に社会調査を実施することにより、より集団主義的な県や州ほど協調的幸福感の効果が強く、自尊心の効果が低いという仮説を検討した。

4. 研究成果

本研究の結果、協調的幸福感尺度の構成概念妥当性は、概ね仮説のとおりを検証された。すなわち、フィリピンと日本の協調的幸福感の効果はポーランドより強いことが確認され(表1と図1)、この結果は協調的幸福感の効果が不確実性の回避ではなく、集団主義に伴うものであることを示していた。

また、この文化差は、学生のみならず日本とポーランドの間で社会人を参加者とした場合も同様の結果が再現された(表2と図2)。学生と社会人では、発達年齢の他、主流文化への深度が異なると考えられるが、そういった両者の間で本研究の結果は一般化すること

表1

一般的な肯定的感情に対する協調的幸福感と自尊心の効果、およびその文化差の効果

説明変数	Model					
	B	SE	β	p	95% CI lower	95% CI upper
・性別 (0, 1)	.09	.04	.06*		.01	.16
・年齢 (18~30)	.00	.01	.01		-.02	.02
・国籍ダミー 1 (比0:日1:波0)	-.12	.05	-.09*		-.22	-.02
・国籍ダミー 2 (比0:日0:波1)	-.36	.06	-.22***		-.47	-.24
・協調的幸福感	.45	.07	.45***		.33	.58
・自尊心	.17	.09	.14†		.00	.35
・協調的幸福感×国籍ダミー 1	-.01	.08	-.01		-.16	.14
・協調的幸福感×国籍ダミー 2	-.20	.09	-.09*		-.37	-.02
・自尊心×国籍ダミー 1	-.11	.10	-.06		-.31	.09
・自尊心×国籍ダミー 2	.16	.12	.06		-.07	.39

Note. †p<.1, *p<.05, **p<.01, ***p<.001.

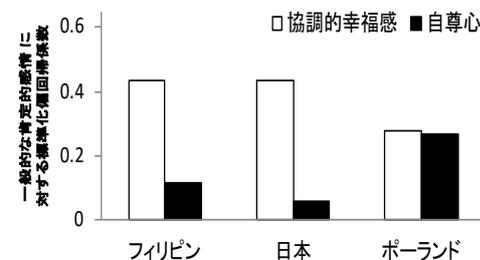


図1. 一般的な肯定的感情に対する協調的幸福感と自尊心の効果 (3ヶ国学生比較)。

表 2
一般的な肯定的感情に対する協調的幸福感と自尊心の効果、およびその文化差の効果

説明変数	Model					
	B	SE	β	p	95% CI lower	95% CI upper
・性別 (0, 1)	.06	.04	.04		-.03	.14
・年齢 (18~81)	.00	.00	-.07 [*]		-.01	.00
・国籍ダミー (日0:波1)	-.17	.05	-.12 ^{***}		-.27	-.08
・協調的幸福感	.46	.06	.58 ^{***}		.35	.57
・自尊心	.15	.08	.13 [†]		.00	.30
・協調的幸福感×国籍ダミー	-.19	.07	-.17 ^{**}		-.32	-.06
・自尊心×国籍ダミー	.16	.10	.09 [†]		-.02	.35

Note. [†] $p < .1$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$, ^{***} $p < .001$.

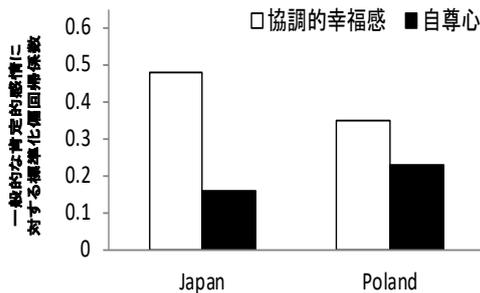


図 2. 一般的な肯定的感情に対する協調的幸福感と自尊心の効果 (2ヶ国社会人比較).

が確認された。

次に、日本の県、および、アメリカの州の地域文化差を、各国内でそれぞれ比較した。日本人社会人に社会調査を実施し、780名を分析対象とした。また、アメリカ人社会人に社会調査を実施し、777名を分析対象とした。個人主義-集団主義の地域差は、日本とアメリカそれぞれの社会変数を用いてこれを定義・標準化した先行研究 (Yamawaki, 2012; Vandello & Cohen, 1999) の得点を用いた。

本分析では、多くの県や州に跨いでデータを収集することで、全般的肯定的感情 (例: 幸せ) を説明する協調的幸福感と自尊心の回帰モデルをレベル 1、地域文化の得点をレベル 2 として、協調的幸福感と自尊心の効果を地域文化得点が調整するという階層線形モデルを想定して分析を行った。この方法は、前述の国際比較と比べ、国内比較を用いている点で国を跨いだ翻訳誤差は少なく、複数の地域を通底する社会変数による連続量の調整効果を検討している点で、個人主義-集団主義の文化的文脈についてより精緻な検討を行うことを可能としている。

分析の結果、協調的幸福感の効果が集団主義の県や州ほど強く、自尊心の効果は反対に集団主義の県や州ほど弱いことが示された (表 3 と図 3、および、表 4 と図 4)。社会変数で定義された国内の地域差において仮説の結果が理論的に再現されたことは、協調的幸福感や自尊心が幸福に占める含意が、国文化

のみならず、地域文化など個人に近い社会的環境によって調整されていることを示す。

表 3
一般的な肯定的感情に対する協調的幸福感自尊心の効果、および県の文化 (集団主義得点) との交互作用

説明変数	Coefficient	Standard error	t	p
For 切片, β_0				
切片2, γ_{00}	2.89	0.03	85.53	***
県の集団主義得点, γ_{01}	0.00	0.00	-1.62	
For 性別 slope, β_1				
切片2, γ_{10}	-0.01	0.05	-0.20	
For 年齢 slope, β_2				
切片2, γ_{20}	0.00	0.00	-1.38	
For 協調的幸福感 slope, β_3				
切片2, γ_{30}	0.62	0.05	11.79	***
県の集団主義得点, γ_{31}	0.00	0.00	2.10	*
For 自尊心 slope, β_4				
切片2, γ_{40}	-0.08	0.06	-1.27	
県の集団主義得点, γ_{41}	-0.01	0.00	-2.59	*

Note. [†] $p < .1$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$, ^{***} $p < .001$.

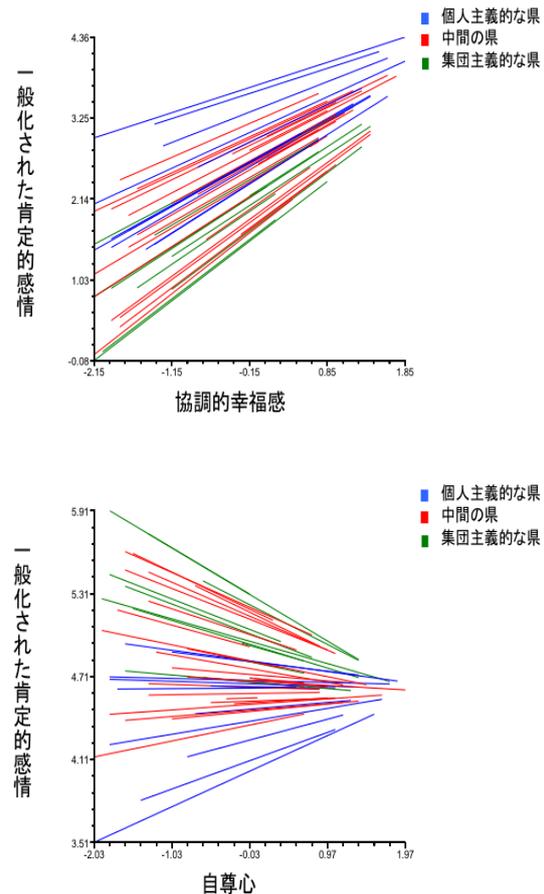


図 3. 一般的な肯定的感情に対する協調的幸福感 (上) と自尊心 (下) の効果の県によるばらつき (日本国内)

表 4

一般的な肯定的感情に対する協調的幸福感と自尊心の効果、および州の文化（集団主義得点）との交互作用

説明変数	Coefficient	Standard error	t	p
For 切片1, β_0				
切片2, γ_{00}	3.01	0.06	50.06 ***	
州の集団主義得点, γ_{01}	0.00	0.00	-0.31	
For 性別 slope, β_1				
切片2, γ_{10}	0.13	0.04	3.34 **	
For 年齢 slope, β_2				
切片2, γ_{20}	0.00	0.00	-0.26	
For 協調的幸福感 slope, β_3				
切片2, γ_{30}	0.43	0.04	11.08 ***	
州の集団主義得点, γ_{31}	0.02	0.00	4.77 ***	
For 自尊心 slope, β_4				
切片2, γ_{40}	0.32	0.05	7.02 ***	
州の集団主義得点, γ_{41}	-0.02	0.00	-4.26 ***	

Note. † $p < .1$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

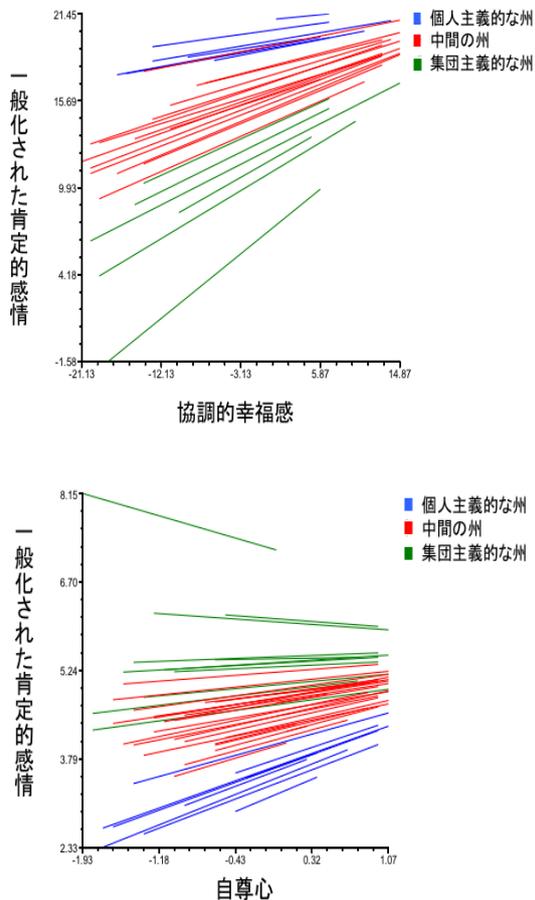


図 4. 一般的な肯定的感情に対する協調的幸福感（上）と自尊心（下）の効果の県によるばらつき（アメリカ国内）

本研究から得られた知見を総合すると、(1) 文化的文脈は、肯定的な感情の含意を左右しており、(2) 協調的幸福感はより集団主義的な文化的文脈における幸福の含意を捉えることができています。本研究の成果は、特に、不確実性回避の文化差との弁別的妥当性、および、国内地域差の比較と階層線形モデルによる収束の妥当性を実証した研究として意義がある（現在、洋雑誌論文として投稿中）。

本研究の応用的な意義としては、昨今文化間で個人の幸福を尋ねる質問（例：あなたは幸せですか？）を用いて幸福度ランキングを作成するなどの方法に限界を指摘できるといふことがある。具体的に、こういった既存の方法では、文化的文脈によって系統的に左右される幸福の含意（自尊心など自己の肯定感とその主な含意なのか、それとも、協調的幸福感など関係性の調和がその主な含意なのか）を十分に加味できておらず、こういった文化独自の幸福感の側面を平板化している可能性がある。もちろん、共通の定義によって国の幸福度ランキングを行うメリットはある（例：民主主義の国ほど幸福感が高い、など）が、文化の多様性を十分に尊重した幸福測定を行いたいという、多様性を尊重した視座に立った場合は、本研究の示した幸福の含意に見られる系統的な文化差は決して無視できるものではないだろう。こういった観点は、GDP 以外に社会の成功を記述する必要がある現代において国際的な意義も持つ(OECD, 2011; Resolution No. 65/309)。

国文化差のみならず地域文化差にも本研究の分析結果が一般化したことは、個人に近接した環境(Uskul & Oishi, 2018)によって幸福感の含意（主に自己の肯定感か、主に関係の調和か）が左右されることを示唆している。敷衍すれば、集団主義などの文化的文脈が、具体的に個人のまわりの環境から、どのようなプロセスを経て個人内の意味づけである幸福感の含意に影響を与えるのか、あるいは、個人の幸福感の含意がなぜ環境と関連を持つのかについて、個人の感情過程と、個人を取り巻く社会文化的環境との相互作用の具体的なあり方を測定・分析するという観点に立ってその詳細を明らかにすることが可能であると考えられる。本研究の結果得られた、この新しい観点に立った妥当性研究として、日常的な対人関係における相互作用と、それに参加する成員の協調的幸福感を測定する試みを実施している（小森・一言・竹村・打田・内田, 2018）。また、本研究の延長として、南米と中国を含んだ社会調査、および、協調的幸福感を左右する個人の社会環境に焦点を当てた研究を、平成 30 年度より科学研究費補助金「基盤 C」の採択を受けて開始した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 6 件）

① 小森政嗣・一言英文・竹村幸祐・打田篤彦・内田由紀子 (2018). 携帯端末による農村の重層的な社会ネットワークの調査とネットワークの分解. 第1回犬山認知行動研究会議. 京都大学霊長類研究所.

② 一言英文・Zemojtel-Piotrowska, M.・Datu, J. A. (2017). 協調的幸福感と活性状態. 日本心理学会第81回大会. 久留米シティプラザ.

③ Hitokoto, H. (2017). Systematic cultural variation of interdependent happiness. Regional Conference of Psychology 2017. University of Social Sciences and Humanities, Hanoi, Vietnam.

④ Hitokoto, H. (2017). Cultural construction of happiness: Cross-cultural Comparisons of the Interdependent Happiness Scale. Toward a Better Quality of Life in East Asia. College of Social Sciences, University of Ulsan. University of Ulsan, Ulsan, Korea.

⑤ Hitokoto, H. (2016). Culture and Well-being -Understanding well-being in the interdependent socio-cultural context-. Symposium of Culture and Well-being at Counseling and Educational Psychology Department, De La Salle University. De La Salle University, Manilla, Philippines

⑥ Hitokoto, H. (2016). The interdependence of happiness: Its measurement validity and concept application. International Association for Cross-Cultural Psychology 2016. WINC Aichi.

〔図書〕（計 3 件）

① Hitokoto, H., & Ishii, K. De Gruyter Mouton. Handbook on Language and Emotion. 2018. In press.

② 一言英文、北大路書房、感情心理学ハンドブック、2018、印刷中

③ Hitokoto, H., & Uchida, Y. Springer. Close Relationships and Happiness across Cultures. 2018. In press.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
一言英文 (HITOKOTO, Hidefumi)
福岡大学・人文学部・講師
研究者番号：80752641

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：

(4) 研究協力者
Magdalena Zemojtel-Piotrowska
Jesus Alfonso D. Datu